

謎の組織に捕獲されて数日。
身体を好き勝手に弄ばれ
陰核の感度を異常なものに
されてしまった楓。
しかし、訓練されたその
強い精神でかなたちに
態度だけは反抗するのであった。



捕獲されてから三日目。
ついにスーツを脱がされ
完全に全裸にされた楓。
更に拘束が施された。
それは関節という関節
全てに、腰や手足の指の先
まで全身を全く動かせない
ように念入りなものだった。
更に特殊なネジで止められ
専用の工具を使わなければ
外せないように
なっていた。



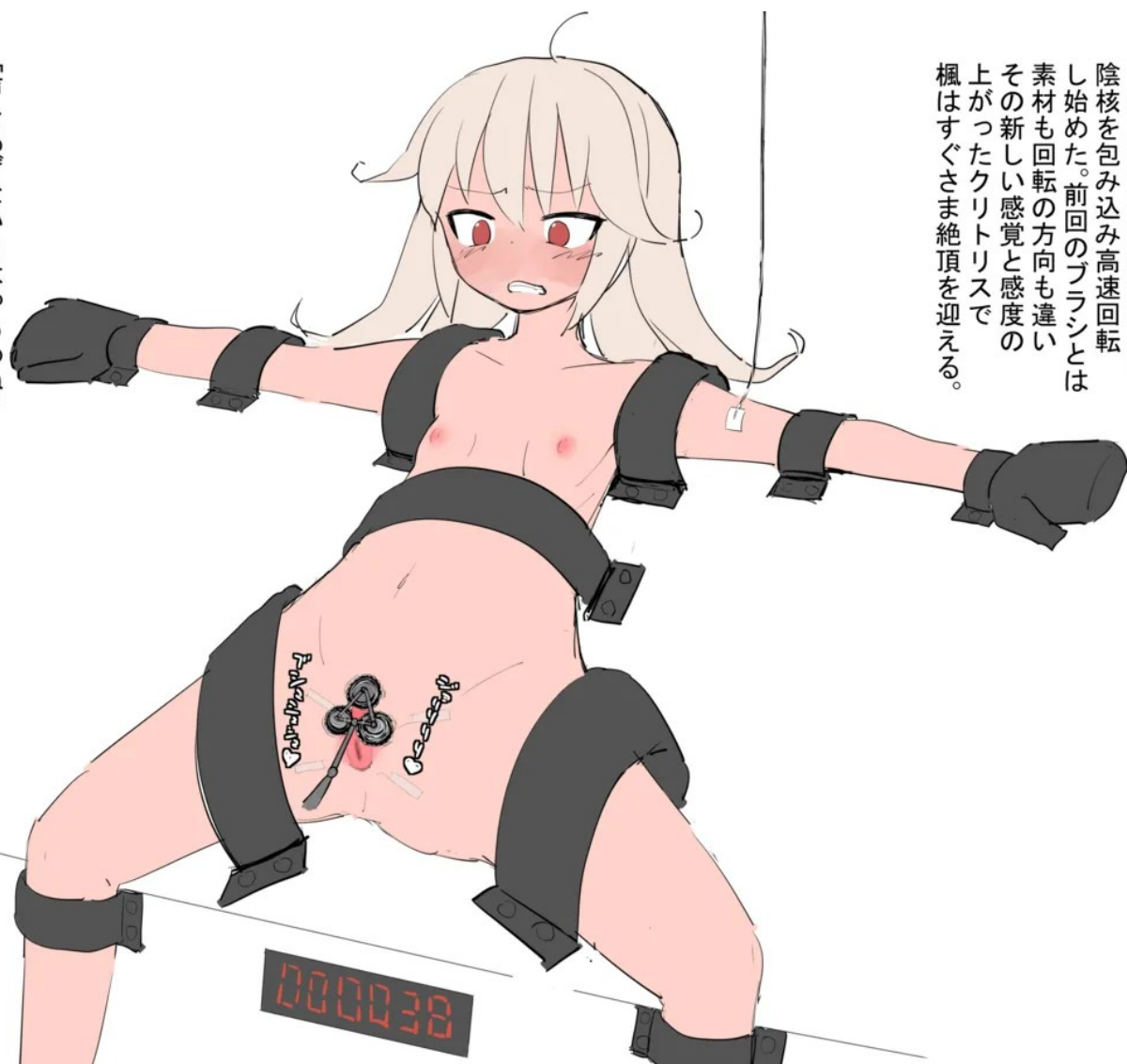
股はカエルのように開かれ毛の生えない幼い恥丘からは年齢に不相应な
包皮を切除され異常に肥大化した陰核が真っ赤に勃起している。
完全に年頃の少女がするような見た目格好ではなかった。しかし幼い頃から
数え切れないほどの異性に身体の隅々まで見られながら開発されてきた
楓には今更この程度の格好は何とも思わない。

今回は前回のかなと変わり
涼と名乗る少女が拷問の
担当をしていた。
「無様ね無能スパイ！
天羽楓だっけ？まあ何でも
いいや。全裸で張り付け
られておま●こ丸見えに
されるのはどんな気分？」



「ふん、下品な。今更誰に裸を見られたところで何でもない」
「ふーん、羞恥も忘れた女ほど哀れなものはないわね！」
「まあでも無駄にプライドだけは高いみたいだから私が遊んであげる」
「そういうと涼はパネルを操作し始める。すると天井からアームが伸びてきた。
それにはブラシが三つ付いており真ん中に隙間が空いていた。
ちやうど突起が真ん中に収まる作りだ。」

そのブラシは当然のごとく
陰核を包み込み高速回転
し始めた。前回のブラシとは
素材も回転の方向も違い
その新しい感覚と感度の
上がったクリトリスで
楓はすぐさま絶頂を迎える。



「声をあげないとはやるわね」

「……っ、ここの程度じゃ感じないわよ」

「あらそう？その割りにギリギリみたいだけど！ちなみに絶頂回数が
分かる様になってるから。まだ一分も経ってないのに三十八回もイってるわよ
感じないなんて嘘付き」

「だま……れっ……!」

「いつまでその強がりが続くか楽しみ♡とりあえず一週間ずーっとこの状態で
頑張ってもらおうから、ご飯は心配しないでいいわよ。その媚薬入り点滴だけで
栄養を賄えるから。ついでに全身に媚薬が回るけどね(笑)」

「一週間後」
「久しぶり…おしっこ
まみれじゃない(笑)
まあしょうがないか」
一週間指先まで一ミリも
動けないように拘束された
状態でクリトリスをブラシで
研磨され続けた楓。
尿は垂れ流しになり
絶頂回数は一万を超えていた。



「普通の女の子だったらいき過ぎてショック死してるレベル。だって一週間ずっとクリトリス擦られてるんだもん。しかもめっちゃやな感度で。それなのにそんな顔できるなんてすごい、壊し概があるわね♡」
正直いきすぎて睨むくらいの余裕しかなかった楓はこれ以上の責めが行われることに股を疼かせほとんど枯れ切った尿をチヨロチヨロと垂れ流す。しかしなお反抗の姿勢を崩さない。それが逆に涼たちの嗜虐心をくすぐる。

数日に及ぶブラシ責めが終わったら新たな拘束を施される。あらゆる拘束・拷問を開発することも目的であるため多種多様な器具を使用するために文字通り実験道具のように使われる。
今回の拘束は腕と足がすっぽり飲まれるように拘束され、横から伸びたアームで当然のように秘裂を限界まで開かれている。



楓の秘部はこれまで異常な開発をされてきたとは思えないほど綺麗な桃色である。しかし、その頂点に居座る突起は相変わらず年齢に不相応な大きさに勃起し痛々しく真っ赤に染まっている。陰核の大きさもさることながら、媚薬などの効果で感度はすでに一般女性の百五十倍には達しており、普通の少女なら少し触れられるだけでいき狂っているだろう。しかし、訓練を重ねてきた彼女だから何とか正気を保っている。ただしそんな彼女ですら触れていない陰核でも絶頂を耐えるのがやっと、何かに触れられれば一瞬で絶頂してしまうのは避けられない。

「気分はどう？気持ちよさそうだったねー」
「今回も変わってかなが担当する。」
「ふん、あの程度で私を屈させようと思ったら大間違い」
「へえー、おしっこ垂れ流しにしていきまわったのに？」
「…っ、生理現象だからしょうがないだろ！」
「そっかー、それはしょうがないね？」



明らかに馬鹿にしてくるかなに苛立ちが隠せない楓。
「まあ楓ちゃんはツンデレだから気持ちよくても素直にいえないんだよね
うんうん。そんな楓ちゃんに今回は涼の新作を試させてもらうね♡」
「そういうとそそり立った楓のクリトリスの根元にリング状の機械を取り付ける。
「また感度を上げるとかその手のものか。馬鹿らしい、同じことしかできないのか」
「ふふん♡舐めてたら大変なことになるよ♡」

A chibi-style illustration of a pink-skinned girl with blonde hair and red eyes, looking surprised or blushing. She is wearing a black bikini top and a red rope around her waist. Her chest is exposed, and there are small white marks on her skin.

かながにやりとする。楓は絶頂を迎えた。と思った。一気に快感が爆発するあの感覚。これ以上責められたくなるあの一線。それが来ないのだ。しかし快感は止め処なく襲ってくる。

[illegible]

A chibi-style illustration of a pink-skinned girl with blonde hair and red eyes, looking surprised or blushing. She is wearing a black bikini top and a red rope around her waist. Her chest is exposed, and there are small white marks on her skin.

「いやだあああああああ……無理………ほんとに死んじやう………」
かなはニコリとだけ返して部屋を去った。

「三日後」

「ごめんね、忙しくて三日も放置しちゃった♡」

「あへえっ……うええええええええっ……おえっ……!!!!!!」

「あら、流石の楓ちゃんも口答えできなくなっちゃってる、イケないって逆に辛いよね……いい勉強になるわ♡」



結局三日間も放置されその間一度も絶頂できなかった楓。陰核は爆発しそうなほど充血し疼いている。尿は完全に出きっておりかなが来た頃には尿道がくぱくぱと動いているだけだった。

「イカへてえええ！イキだいいいいいいい……クリ爆発しちゃううっ……!!」

「あら、そんなにイキたいの？でも自分からお願いしてくる楓ちゃん可愛いから今回は特別にイかせてあげようかな♡本当はこっからもう一日追加してあげようと思ってたんだけど(笑)気持ちよすぎて死なないでね？♡」
そういうとかなは絶頂抑制機を取り外す。

目が覚めると楓は拘束から開放されていた。何もない部屋に全裸で
気絶していた。しかし一つだけ制限があった。その違和感にすぐに気付く。
今まで気絶するほど責め続けられてきた陰核が謎の箱のような物体で
包まれている。当然外そうと試みるが何か接着剤のようなもので着けられて
いるのか剥がす事ができない。
「あ、起きた？」
そこに今回は涼が部屋に入ってくる。
「何これ、外しなさいよ」
「今更あんたの願いが聞き入れてもらえるとでも？あんたはもう
この施設内では人権なんてものは存在しない。あんたの意思は尊重されないし
ただ実験道具として使われるのよ！」



「下衆が」
「好きにだけ吠えなさい！哀れな無能スパイ女！そんなこと言ってられるのは
今だけなんだから」
「何？」
「それ、絶妙に気持ちいいでしょ。中で気持ちよすぎないギリギリのラインで
媚薬を注入しながら刺激してるのよ。だから常に痒いところに手が届かない
ような快感が与えられるの。でもあることをすればいくこともできるし
外すこともできるわよ」
「...どうすればいいんだ」
「心の底から『変態クリち●ぽでイかせてください』って懇願しなさい。心の底
からよ？上辺だけの言葉じゃダメ。それがしつかり感知して判断するから。
それで百回クリイキシなさい、一回ごとにしつかり懇願するのよ」
「ふざけ...っ」
「別にやらなくていいけど一生クリがこそばゆい状態で過ごす事になるわよ、
当然その格好でね！」

「屑が…」
「ほらそんなんじゃないよ、しっかり心からイきたいと思っ
て、自分がド変態であることを自覚しながら懇願しなさい」
「っ…絶対殺してやるからな…」
「はいはいどうせ無理だからさっさとお願いしたら？」
「…っ…へ、変態…ク、クリち●ぽで…い…イかせて…くださ…い」
「そんなんでイかせてもらえろと思ってるの？」
「ふざけやがって…へ、変態クリち●ぽでイかせてくださいい…っ！」



「心がこもってない、ソレが反応してないでしょ」
「殺す殺す殺す…っ」
「しっかりイきたいって考えるのよ、実はイきたいんでしょう？素直になりなさい」
楓は徐々に洗脳されていくかのように神経を自分の股に、陰核へと集中させていく。
「変態クリち●ぽでイかせてくださいい…」
「バチンッ！」
その瞬間目の前が真っ白になりその場にへたれこむ。プシュプシュと潮を吹きながら楓は絶頂を迎えた。
「アハハ！無様！なんて無様なの！ほら後九十九回よ！」
その後も醜態を晒しながら涼の前で絶頂を続けた楓。しかし百回の絶頂を迎え開放されるころには丸一日が経過していた。

長い屈辱の時間が終わり休む暇なく再び拘束される。

次は四つんばいの状態で手足を根元から固定する形で女の子の大事な部分が後ろにしっかりと見えるようにされている。相変わらず剥きだしのクリトリスは

大きくルビーのように真っ赤に膨らんでいる。『もうそろそろ拘束されてるほうが落ち着くんじゃない？』

再びかなが現れて言う。『そんなわけないでしょ、相変わらず

芸がないのね』

『そんなこといつていいの？あ、やっぱり虐められるのが好きなのね』

『あんたたちが勝手に人の身体を弄んでるだけだよ』

『ふふ、やっぱり楓ちゃんの強がりさんがかわいい』



かなは笑顔で無防備な楓に近づき、そして楓のパンパンに腫れている陰核を指でなぞる。

「ッ……!？」
一撫で。たった一撫でで楓は
三回連続で絶頂した。
「……っ、次は何をしたの!？」
「んー? 何もしてないよ? ただ指で
触っただけ。薬も何も使ってない」
「嘘……こんな……」
そう。楓の陰核は既に通常の五百倍の
感度になっていた。ただ人に触られる、
そんな何でもないことですら
恐ろしい快感が襲う身体になっていた。
「あんだけ頑張って訓練して
鍛えたクリちゃんがこんなに
えっちななっちゃったね♡」
「黙れ! あんたたちが勝手に
やったんでしょ……!」
「そうかもしれないけど、
でも楓ちゃんの身体は
喜んでるみたいだよ?」



かなはそういうと左手を使ってアナルにも指を挿入れ始めた。

「あぁっ！っ！？」
その瞬間再び絶頂。
今まで触れられていなかった部分への急な責めに
感覚が追いついていなかった。それほど太くもない
指の挿入だけで感覚が研ぎ澄まされ感じてしまった。
特に感覚が異常に上昇した陰核は指の指紋「っ」っを感じている
ような錯覚に陥る。そしてこの何でもない責めに
ここまで感じてしまったのは、薬漬けにされた陰核の存在と
同じくらいの年頃の少女に
一方的に裸を見られ、身体を
弄られているという事実
女としての本能的なマゾの部分
が快感を倍増させていた。
本人は自覚していないが。
「イっ！イぐっ！
クリやだ！お尻やだぁ！」



過酷な性的拷問の訓練を行ってきた楓だったが、ついになたたちの
魔の手に堕ちてしまったのだ。しかし彼女の精神の強さがこれからも
彼女たちに歯向かい、心を折られ彼女たちを悦ばせる無限ループに
陥るのだ。







